

幽霊の手紙

野村胡堂

一

江戸開府以来の捕物の名人と言われた銭形の平次が、幽霊ゆうれいから手紙を貰ったという不思議な事件は、子分のガラッ八こと、八五郎の思いも寄らぬ縮尻しくじりから始まりました。

「親分、近頃は暇ですかえ」

「なんて挨拶だ。いきなり人の前へ坐ふとろって、懷手ふところをしたまま長い顎あごを撫でながら——暇ですかえ——という言い草は？」

平次は脂下りやにさがに嚙やんだ煙管をポンと叩くと、起き上がってこの茫ぼうとした子分の顔を面白そうに眺めるのです。

「銭形の親分が、この結構な日和に籠こもって、寝そべったまま煙草けむりの烟を輪わに吹いているんだから、暇で暇で仕様がないにきまつて居るじゃありませんか」

「馬鹿だなあ、だからお前はまだろくな仕事が出来ないのだ。こう寝そべって煙草の烟を輪わに吹いている時こそは、こちとらが一い番忙しく働いている時なんだ」

「へエー」

「クルクル動いている時は、ありや遊びさ。こう吞氣くわんきそうにしている時こそ、ありったけの智恵を絞しぼって、悪者と一騎討いっきとの勝負をしている時だよ」

「へエー、いったいその悪者はどんな野郎なんで？」

「たいそう感心するじゃないか、あんまり真に受けられると引ひつ込みが付かなくなるが、なアに、そんなたいした相手じゃない。

お前も知つてのとおり、深川島田町の佐原屋さわらの支配人殺しの一件だが、下っ引任せでまだ下手人が拳らねえから、いよいよ俺も御興を上げなきゃなるまいと思つているところよ」

「実はその事なんですがね、親分」

「なんだ、いきなり膝なんか乗り出して」

「その佐原屋の騒動とは、一万両とかの金の行方が絡からんでいるそうじゃありませんか」

八五郎の眼の色は少し變つております。

「それがどうしたというのだ」

「あつしは古いことはよく知りませんが、何んでも五年前に死んだ佐原屋の主人甚五兵衛が隠して置いた、一万両という大金ありの在所かを嗅ぎ出したので、支配人の専三郎が殺されたに違いない。――

――首尾よく下手人を捉まえて、一万両の金を捜し出せば、千両の褒美を出す――つて、あの店の采配を振っている、主人の弟あの小豆沢小六郎という浪人者が言つたそうじゃありませんか」

「フーム」

「先刻お神樂の清吉の野郎が眼の色を変えて飛んで行きましたよ。『千両の褒美はこの清吉がきつと取つてみせる、済まねえが八兄あにい哥後で文句は言わないでくれ』つて、癪しやくな言い草じゃありませんか。だからあつしは、親分が暇で仕様がないうなら、一番乗り出してその千両の褒美をせしめ――」

「馬鹿野郎」

「へエ――」

いきなり馬鹿野郎を浴びせられて、八五郎は首を縮めました。「金を目当の仕事なんだ、真っ平御免蒙るよ。お上の御用は勤め

ているが、褒美の金なんか釣られてウロウロするようなそんな野郎は大嫌いさ。さつさと帰ってくれ、帰らなきゃ野郎ゴミと一緒に掃^はき出して塩をブツかけるから」

平次はもつてのほかの機嫌でした。尤もこんなことをポンポンと言う癖に、寛々と胡坐^{あぐら}なんかかいて、ニヤリニヤリと笑っているのです。この秘蔵の子分のガラッ八が、腹の底から金が欲しくてウロウロしているのではないことはよくわかっているのです。驚いたなア、あつしは褒美の金が欲しくて言ったわけじゃありませんよ。眼の色を変えて飛んで行く、お神楽^{かぐら}の清吉の野郎が癪にさわったんで。——それに千両ありや、親分にいつまで貧乏させることはないし」

「それが余計だよ。馬鹿だなア、俺は酔狂で貧乏しているんだ。お前なんか不憫^{ふびん}を掛けて貰いたくねえ」

「それからもう一つ。佐原屋の後見で、先代の義理の弟小豆沢小六郎という浪人者は、あつしとは懇意なんで」

「浪人者とお前がかい」

「浪人者といっても、すっかり町人になり済ましていますよ。二三年前から品川の沖釣り^{おきづり}で心安くなって、竿先三尺^{ささ}の附合いで」

「竿先三尺の附合いという奴があるかい」

「へッ、柄先三寸^{つか}の洒落^{しゃれ}で」

「馬鹿だなア」

「これは二た月も前のことなんです——小豆沢小六郎という浪人者が言うんですよ。先代の主人が隠した一万両という金が出て来ないうちは、佐原屋に騒動が絶えない、金の祟^{たた}りというのだろう。銭形の平次親分のような智恵^{たくま}の逞しい人間に来てもらって、

なんとかしてこの金を探し出したい——と、そう言っていましたよ」

「フーム」

「その金が祟って、また支配人の専三郎が殺されるようなことになったじゃありませんか」

「——」

「だから親分、ちよいと出かけて行って——」

「まア止そう。一万両なんて金は、天井裏や床下に隠し終わせる代物じゃねえ。いずれ時節が来れば出るだろう。——が支配人殺しは俺も考えているんだ。あんまり手際がよくて、下っ引を二三人やったくらいじゃ下手人の見当も付かないが、これは放って置くわけに行かない」

「だから親分」

「斯うしようじゃないか、今まで俺が聞き出したがは皆んなお前に話してやった上、何もかもお前に任せて俺は手を引く。その上、下手人を縛ろうと、千両の褒美を取ろうと、お前の腕次第ということにしてはどうだ」

「本当ですか、親分」

「誰が嘘を言うものか、褒美が付いていなきや、俺がやろうと思つて、ずいぶん念入りに調べさせてあるよ。これだけのことをしてやって、それでもお神楽の清吉に負けたら、坊主にでもなるが宜い」

「勝ったら、親分」

「千両の褒美で長屋でも建てるんだね、岡っ引きよりは家主^{やぬし}の方が柄に合いそうだぜ。嫁は俺が世話してやらア」

「誰です、親分。良い心あたりがありますか」

「煮売屋のお勘子よ——あの娘は何か芸当があるんだってね。寝小便と癩癩」

「止して下さいよ、親分」

二人はそんな冗談を言いながらも、仕事の打ち合せは進行させました。

二

深川島田町への道すがら、銭形平次は八五郎のために、事件の経緯を五年前主人佐原屋甚五兵衛が殺された時に遡^{さかのぼ}って話しました。

「佐原屋というのは、深川の材木問屋でも一二と言われた家柄で、店の株、諸国の山元への貸金、材木置場に積んである材木などのほかに小判で一万両以上も持っているという評判だったが、今から五年前、主人の甚五兵衛は何を考えたか、その現金を一人でコソコソと隠し始めた。たぶん六十を越しても子供のない甚五兵衛は、自分の命や金を誰かに狙われていることに気が付いたのだらう」

「金持は楽じゃありませんね」

八五郎は無駄を言いました。

「黙って聴け、お蔭様でこち[、]と[、]らは十両と纏^{まと}まった金を持ったこともないから、懐ろ手をして江戸の町を歩けるんだ」

「違えねえ」

そう言う江戸の町はもう秋でした。赤とんぼのスイスイと飛ぶ

河岸縁を、襦袢臭い裏通りを、足早に深川へ廻りながら、平次の話はつづくのです。

「その佐原屋甚五兵衛は、五年前の秋——ちようど今頃だ、永代の下から、水死人になって引揚げられたんだ。肋骨が折れて、水を呑んでいなかったの、人に殺されてから水へ放り込まれたと解り、いろいろ調べると、甚五兵衛の用箆の抽斗から、書置きが出て来た。それを見ると、『私が若し人に害められて死ぬような事があつたら、二人の甥を調べて貰いたい。近いうちに私を殺す者があるに違いないと思うが、下手人は甥の専三郎でなければ彦太郎だ。佐原屋の跡は義弟の小豆沢小六郎が女房の後見をしてしばらく立て、五年経った後で二人の甥のうち、善人と見極めの付いた方に家督を譲るように』と書いてあつた」

「念入りですね」

「佐原屋甚五兵衛は、ときどき曲者に付け狙われたらしいが、それが、二人の甥の何方かに似ていたんだらう。——ともかく、甚五兵衛が死んでみると下手人の疑いは真正面から専三郎と彦太郎に懸った。二人ともその頃三十五、六で、二人とも身体は達者だし、欲も相当に深そうだ。が、何が幸せになるかわからないもので、その晩専三郎の方は風邪を引いて早寝をして、自分の部屋から一步も外へ出ないと解ったのに、彦太郎の方は町風呂へ行つて碁会所へ顔を出して、八幡前の矢場をのぞいて歩いたのを多勢の人が見ている。伯父の甚五兵衛が八丁堀へ行つた帰り、提灯をつけて永代橋へ差しかかったところを、いきなり飛び出して撲り殺し、死骸を大川へ放り込んだと見られて証しが立たない」

「へエ——」

「しかしどんな調べにも、彦太郎は知らぬ存ぜぬの一点張りで、伯父殺しを白状しなかったのと、一万両の行方も知っていなかったので、罪の疑わしきは罰^{ばつ}せずとやらで、三宅島へ遠島になった」
「変なお裁きですね」

「お上のお情けだよ。遠島にしておけば、万一^{ほんとう}真当の下手人が挙げたとき島から呼び戻せる」

「なるほどね」

「ところが、その船が三宅島へ着いてまもなく、彦太郎は死んだという通知^{しらせ}が島役人から届いている」

平次の話が次第に住境に入るところ、二人はちょうど永代橋を渡っておりまして。ガラッ八はことごとく感に堪えて、

「それからどうしました」

昔話を聞く子供のように続きをせがみます、

「それっきりさ。それから何しろ五年も年月が経っているが一万両の金は相変わらず出て来ない。——その辺のことは小豆沢とか言う浪人者からお前も聴いた通りだ」

「^{くす}撥ぐったような話ですね」

「五年経てば罪のなかったもう一人の甥の専三郎が、佐原屋の跡取りになるわけだが、いよいよ先代の命日が明後日という日、あの騒ぎが始まった」

「因縁ですね」

「それを話す前に、先代の主人甚五兵衛が死んだ後の佐原屋のことを少し話して置かなきゃなるまい。まず島流しになった甥の彦太郎には十二になる娘が一人あった。親は親でも、小さい者まで憎しみを掛けては非道だという小豆沢小六郎の計らいで、親類の

反対を押しきって佐原屋に引取って育てている、さすがにもとは武士だけのことはあるよ。その娘はもう十六くらいだろう、お筆とか言って飛んだ綺麗な娘だそうだ」

「綺麗でさえあれば島流しの娘だって獄門の娘だって宜いじゃないませんか」

「お前はそうだろうが、世間がそうは行かないよ。それはともかく、佐原屋は後家のお由——これはもう五十七八だが、それが女主人で後見は義弟の小豆沢小六郎、甥おいの専三郎が支配人で昔の通り繁昌している」

「へエ——」

「ところが近頃支配人の専三郎が急にソワソワして、女房のお倉に近い内に大金が入るような事を言っていたそうだ——たぶん一万両の隠し場所を嗅ぎ付けたんだろう。それを取り出すのに手間取っているうち、——一昨日の晩、忍び込んだ曲者に刺さされて死んだ。それはお前も知つての通りさ。尤も二三日前、専三郎の味み噌汁そうじゆの椀の中に、石見銀山の鼠捕りが入っていたそうだが、味が変だからと一口で気が付いて、この時は危ない命は助かったそうだ」

「下手人は、親分？」

「まるつきり見当もつかないよ。ともかく行つて見るが宜い」

そんな事を言っているうちに、二人は島田町の佐原屋の大きな構えの前に立っておりました。

「八、家中の者に一通り逢って見るが宜い。俺はここからすぐ帰るから」

「そんな事を言わずに、親分」

八五郎は少し心細くなった様子ですが、平次は何にか口実を設けてこの日当りのよくない子分に一とかどの手柄を立てさせたかったのです。

「千両の褒美が怖いわけじゃあるめえ、お神樂かぐらの兄哥が見て笑っているぞ」

そう言われると、強いて平次を引留めることも出来なくなりました。

「おや、八兄哥、銭形の親分も一緒じゃなかったのか」

ヌツと店に顔を出したのは、お神樂の清吉でした。

「いや、今日は俺一人だ、——ところで何うだい下手人の当りは？」
「まア行つて見るが宜い。俺はそれより先に一万両の方を捜さがすよ。材木置場を一通り見るだけでも。三日や四日はかかるだろうか
ら」

清吉はそう言つて、草履ぞうりを突っかけるのもどかしそうに、堀割を隔へだてた材木置場の方へ行きました。そこへガラッ八に先鞭べんをつけられるのを恐れる様子です。

「親分さん。御苦労様でございます」

代つて八五郎を迎えてくれたのは、老番頭の藤六という六十男でした。乾し固めたように皺しわが寄つて。一と握りほどの小さい老爺ですが、何んとなくきかん氣らしく、昔はずいぶん荒っぽい人

足を叱り飛ばして、江戸で何番と言われた材木屋の店を預かった人間でしょう。

「あつしは神田の八五郎だが、飛んだことだったね。ところで、支配人の専三郎が死ねばこの身上は誰が継ぐことになるんだ」

「左様でございます。いずれ御親類方の御相談の上ということになりましょうが、後見人の小豆沢様はもとがもとですから、町人の家を継ぐのは嫌だとおっしゃいますし、多分専三郎様の倅の専之助様か、それとも――」

「それとも――」

「彦太郎様の娘のお筆さんということになりましたよ」

島流しになって死んだ彦太郎の娘のお筆が佐原屋の跡取りになるということは、八五郎には想像も出来ないことですが、老巧な番頭の藤六が斯う言いきるのは仔細のあることでしょう。

「専三郎の殺された部屋というのを見せて貰おうか」

「斯うお出で下さいまし」

店を通ってお勝手や納戸や女中部屋を左右に見て行くと、廊下つづきながら別棟べつむねに一つの建物があり、そこに後家のお由、甥の専三郎夫婦、その倅の専之助、死んだ彦太郎の娘のお筆などが住んでいるのでした。

さすがに商売の良材をふんだんに使って、少し手が混み過ぎて下品ではあるが、一応も二応も凝こった家で、庭の掃除そうじもよく行届き、向うの方には銘木めいぼくを貯たくわえておく物置や土蔵やら、滅多に開けたことのない門などが見えております。

専三郎夫婦の部屋というのは裏の中二階になっていて、五六段の広い梯子段を踏まなければ入れず、その梯子段の下には、倅の

専之助の部屋や、後家のお由の部屋があり、母家から廊下伝いに来たにしても、誰にも気が付かれずに、そつと忍び込むことは容易ではありません。

「戸締りは？」

「この離屋はなれは先代の主人が念入りに絵図を引いた建物で、戸締りは恐ろしく厳重でございます——一昨日の朝も、戸締りには何んの変りもなく、内からよく締めてあったそうでございます。死骸を見付けたのは、階下したに寝ていた息子の専之助さんで、父親がいつになく遅いので、中二階を覗いて見るとあの騒ぎでございます」

老番頭の説明を聴きながら中二階に上がると、

「これはこれは」

一番先に顔を出したのは、浪人者の小豆沢小六郎でした。そのために武士を棄てたというひどい跛者ちんばで、身体も至って華奢きゃしゃ、町人のように腰の低い、縞物などを着た、至って碎けた人柄です。尤も髪かみはさすがに武家風で、一刀を提げて居るのは、嗜みたしなを忘れないためでしょうか。

「おや、小豆沢様、飛んだところでお目にかかります。御災難で」

竿先さお三尺の付き合いらしく、八五郎は愛想よく言いました。

「全く災難だよ。だから私は前から一万両の金を探してくれるように頼んでおいた筈だが今となつては仕様がな。——ところで銭形の親分は？」

「参りません、——風邪かぜを引きましてね」

八五郎は淋しい作を入れました。

「いや、八五郎殿で不足を言うわけじゃない。が、銭形の親分が」と肌脱いでくれさえすれば、五年越し探し抜いた一万両の金も、

すぐ見付かるだろうと思うが——」

そんな事を言いながら、八五郎を案内してくれました。

専三郎の殺された部屋というのは中二階の六畳で、その前は危うい手摺てすりを取り付けた縁側になり。後ろの方は唐紙を開けると格子を打った腰高窓の廊下になって、便所に通ずる狭い梯子段に尽きていたのでした。

「お内儀かみさんは、その晩どこに居ました」

「専三郎の女房か、——日本橋の親類へ泊りに行ったよ、——尤もよく専三郎と喧嘩はするが、亭主を殺すほどの大それた女ではない。ハッハッハッ」

小豆沢小六郎は場所柄わきまも弁えず笑い出すのです。

「刃物は？」

「出刃庖丁さ。殺風景な代物だよ」

二本差の小豆沢小六郎から見れば、出刃庖丁はいかにも愚劣ぐれつです。

「母屋おもやのお勝手から持ち出したのですね」

「その通りだ」

「ここからは忍び込めませんか」

八五郎は縁側から危ない手摺もたに凭れて下を覗きました。雨戸は名ばかりで、ろくに締りもなく、地上からの高さはほんの五六尺、踏み台があれば身軽な者ならずいぶん忍び込めないこともありません。

「私もそう言っているよ——清吉とかいう男は手摺くさが腐っているから、危なくて飛び込めまいと言うが、あの通り下の土には、箱か何にかを置いた跡があるだろう。出刃庖丁をお勝手から持ち出

して、庭伝いに別棟べつむねになつてゐる此処へ来たとしたら、此処から忍び込むほかはあるまい。物置を捜したら、踏台にした箱くらいは見付かるだろう。箱の上に乗って手摺に手が掛りさえすれば、此処へ這い上がるのは丈夫な者なら何んでもないことだろう。――此れほど念入りに建てた家だが、専三郎は呑気で此処だけはときどき戸締りを忘れて寝る癖があつたらしいよ」

「――」

小豆沢小六郎の説明は、いかにも要領の良いものでした。ガラッ八の八五郎は妙に職業的な誇りほこを傷つけられたような氣がして、黙りこくつてしまつたのも無理のないことです。

「おや、またあの乞食が来ている、――おい、誰かいなか、おい」

小豆沢小六郎が呼ぶと、二三人の男たちが駆けて来ました。小六郎が指した木戸の外、この中二階から五間とも離れていない路地を、お勝手の方へ虫のように這つてゐるのは、見る影もない壁いざりの乞食老爺で、罵りののしわめく男たちの顔を怨めしそうに見上げながら、

「残り物をやるから、ときどき昼過ぎに來いと御隠居様が御親切に仰しやつて下さいましたよ。ハイ帰ります。打ぶたなくなつて歸りますよ。南無、ブツブツ、ブツ」

何やら独り言をいいながら壁いざりは裏の方へ逃げて行くのでした。片鬢火傷かたびんか何んかで大禿はげになつた上、悪い病いで鼻も頬も潰れたらしく、見る眼も氣の毒なほど痛々しい姿ですが、それでも生活力は旺盛おうせいらしく、馬の草鞋わらじを履いた足と手で、思ひの外に早く行きます。

「あれは？」

ガラッ八はさすがに見逃しませんでした。

「八幡様の境内に十年も前からいる乞食だよ」

「十年も前から」

それでは何んの意味もありません。

四

裏の梯子段を降りると便所で、その先に誰やら人影――。

「あれが専三郎の倅の専之助」

小豆沢小六郎は苦笑いをしております。八五郎にはその苦笑の意味が解り兼ねましたが、やがて眼が廊下の暗さに馴れると、その後ろに寄り添うように立っている、若い娘の姿を見付けました。小六郎の苦笑いの種はそれだったのです。

「あれは？」

「お筆というのだが、――彦太郎の娘の」

八五郎は何も彼も一ぺんに解ったような気がしました。この敵同士のような若い男女――従兄弟同士の倅と娘が、親が非業に死んだ三日目だというのに、もう薄暗い廊下の隅に額を寄せて、何やらひそひそと話しをしている仲だったのです。

「お前が専之助というのだな」

「へえ」

若い男は間の悪そうな顔を挙げました。少し青瓢箪あおびょうたんですが、お店者風の良い男で、せいぜい二十歳前後はたちでしょう。

「親が殺された晩はどこに居た」

「自分の部屋におりました。――御隠居様の隣りの部屋でござい

ます」

「近ごろ父親の素振りに変ったことはなかったのか」

「へエ——」

「お前の父親を怨^{うら}んでいる者はないか」

「一向気が付きません」

「あの晩、何んか物音でも聴かなかったか」

「へエ——、私の部屋の前を通れば気が付く筈ですが——私は寝付の悪い方ですから」

これだけ言うのが精いっぱい、あとは何を訊いても一向頼りがありません。

「お前はお筆というのだね」

「え」

八五郎の問いが娘の方に転ずると、これは小気味の良いほどハキハキしておりました。丸ぼちやの色白で、大きい眼、ほのかなエクボ、愛くるしさが一切のものを救って、何んとなく四方^{あたり}を明るく幸福にせずにはおきません。

「専之助と何を話していた」

八五郎はツイこんな事を訊いて見たくなりました。『この大野暮奴』自分でそんなことを自分に言い聞かせながら。

「何んにも話しゃしません」

「その手に持っているのは何んだ」

「私の部屋にあったんです。専之助さんが捨てた方が宜いって仰しゃるけれど——」

「ちょっと、見せろ」

八五郎は精いっぱい威儀^{いぎ}を作って、娘の手から紙包みを取上

げました。無造作に畳んだのをほぐして行くと中から現われたのは、八五郎の馴れた眼には、紛れもない石見銀山の鼠捕りと判るではありませんか。

「これを何処から出した」

八五郎は急に厳きびしくなりました。殺される三日前、専三郎が危うく石見銀山の鼠捕りを吞まされるところであつたという噂を思い出したのです。

「私の部屋にありました」

「何時からあつたのだ」

「今朝まではなかったんです」

「誰が持って来た」

「解りやしません」

「これが何んだか知って居るだろう、お前は」

「いーえ」

お筆は大きく眼を見張ったまま頭を振るのです。

「お前の部屋を見せて貰いたい。宜いだろう」

「え」

不承不承のお筆に案内させて、八五郎は薄暗い六畳に入って行きました。娘らしく何んとなく艶なまめかしい色彩しきさいと、ほのかな匂においは漂ただよいますが、調度は至って粗末で、押入から引出した荷物の中にも、ろくな着物がありません。世間の手前ここに置いたにしても、島流しの娘はやはり島流しの娘らしく、あまり優待されては居なかつたのでしよう。

一と通り葛籠こうつりも行李こうつりも手箱も見ましたが、何んの変ったこともなく、痛々しくも貧しげなうちにも、何んとなく可愛らしさの溢



れる品々は、こんな殺生なことをしなければならぬ八五郎をすっかり憂鬱ゆううつにします。

いちおう押入の中を調べて八五郎は、そのまま唐紙を締めようとして、フト気が付きました。押入の天井の隅の板が一枚ずれてその間に何やら挟はさまって居るものが見えるのです。

提灯を取寄せてなおも念入りに調べると、それは女物の衿あわせらしく、裾がほんの二寸ばかり、天井板に噛まれて三角に現われているではありませんか。

裏板をハネ上げて、それを引下ろすと、手に従って猛烈な埃ほこりと一緒にズルズルと落ちて来たのは、まさに紫矢緋むらさきやがすりあわせの衿が一枚、見ると胸から袖へ、裾へかけて、斑々はんはんと黒ずんだ血潮が付いて居るのです。

「あ、斯んなところに」

一番先に口を利いたのはお筆でした。

「この袷はお前のものか」

八五郎は屹きつとなりました。

「ええどうして斯んなところにあつたんでしょう。——まア、氣味が悪い」

血の色を見ると、お筆の顔色はサツと変ります。

「来い、お前にはいろいろ聞きたいことがある」

八五郎の手は、お筆の肩にピタリと掛っております。温かいふくよかな肉が波打つように顫ふるえております。

「八五郎殿——それは少し殺生だ。お筆はその通り顫ふるえているではないか」

取りなしたのは小豆沢小六郎です。

「いや、これだけ証拠が揃そろっちゃ」

縄を打たないのが、まだしもこの八五郎の情けだったのです。

「だが、曲者は外から手摺てすりを越して中二階へ入って居るのではないかな」

小豆沢小六郎は手摺ばかり氣にしております。が、八五郎はもうあの腐った手摺などを問題にしてはいません。

そのとき駆け付けて来た下っ引の市助という男に、お筆の見張りを頼んで、八五郎はなおもこの調べをつづけました。

専三郎の女房——専之助の母親のお倉というのは、三十七八の身分柄としては少し取済した口やかましそうな女で、

「あの娘は、父親の彦太郎を島流しにしましたのは、私の配偶つれあいの専三郎の告白のせいだと思ひ込んでいる様子ですよ。同じ屋根の下に住んでいても、私なんかには滅多に口も利きはしません。——

——倅の専之助なら懇ろ^{ねんご}にして居るじゃないかって、——飛んでもない、そんな事があるのですか。倅はあんなに見えても大の孝行者ですもの——」

立てつづけに喋舌^{しゃべ}り捲くるので、訊く方では掛引も技巧も要りませんが、その代り恐ろしい出鱈目^{でたらめ}で、父親が死んで三日経たないうちに、お筆の後を追い廻している倅を、大の孝行者と信じきっているという大甘さです。

先代の配偶^{つれあい}、後家のお由というのは、五十八というにしては恐ろしく老けた女で、何を訊いてもハキハキした返事も出来ず、亡夫甚五兵衛の死後は、義弟の小豆沢小六郎や、番頭の藤六に任せきって、何の疑いもなく阿弥陀様^{あみだ}と首っ引でその日その日を送っていると言った人柄でした。従って一万両の隠し場所も知らず、佐原屋の財政状態にさえも、何んの関心も持っては居なかったのです。

「あの晩、何んか物音を聴きませんか」

「何んにも聞きませんよ。私はこの通り少し耳が遠いので——」
これでは八五郎と雖も^{いえど}手の付けようがありません。

窓から外を見ると、ツイ鼻の先の材木置場で、四五人の人足を指図していたお神樂の清吉は、材木の山の側にある、古井戸の蓋を取って一生懸命覗いております。

「あの材木置場も念入りに搜したが、ことに古井戸は今年になつてからでも二戸も井戸替えをしている、あの中には小判どころか古釘もありはしない」

小豆沢小六郎はそう言って苦笑いをして居るのです。

五

「これだけ証拠が揃っても、可哀想であの娘には縄は打てません。そうかと言って棄ててもおけないから、ともかく親分に相談してからと思つて、町役人に身柄を預けて来ましたよ。どうしたものでしょう、親分」

ガラツ八の八五郎は、その晩取敢ず親分の銭形平次のところへ行つて、その日の報告を済ませた上、こう相談を持ちかけるのでした。

「俺にも解らないよ。だが、石見銀山いわみぎんざんを手に持っていたのは可怪しいな」

「そうでしょうか」

「それから、裕の血はどんな具合だった」

「どんな具合と言っても——斯うベタベタとあちこちに付いていましたよ」

「フーム」

銭形平次はすっかり考え込んでおります。

「何処か変なところがあるでしょうか」

「変なところだらけだよ——ところでその浪人者の小豆沢というのは何処に寝ているんだ」

「これは母屋おもやの方で、番頭、手代、下女、下男などと一緒ですが、小豆沢という人だけは店の二階に寝ていますよ——たった一人で、梯子段の下には小僧が二人、右大臣左大臣のように寝ているんで、夜中にそつと外へ出ることもなんか思ひも寄りません」

「番頭は」

「女中部屋の隣りで」

「小豆沢という浪人者は、中二階の手摺てすりが怪しいというのだな」
「腐っていますよ、あの手摺は——北向きですから」

「でもちようど土の上の跡に合う踏台はあるだろう、物置かなんかに」

「そんな物はありません。一応は捜して見ましたが」

「少し心細いな」

「踏台くらいあっても、あの手摺へ這い上がるのは、猫でなきや子供ですよ。大の男の出来る芸じゃありません」

「フーム、まあ宜い、しばらくお前に任せて置くとしよう。ところでお静——酒はあるだろうな、千両の褒美の前祝いに一本つけないか」

「ハイ」

若い女房のお静は次の間から立上がって、お勝手に行った様子でしたが、何んに驚いたか、

「あれ——ッ」

恐ろしい悲鳴を挙げて、二人のいる部屋に転げ込んで来ました。

「何をしたんだ、騒々しい。素人衆しろうとしゅうの娘っ子じゃあるめえし」

「でも——水を汲むつもりでお勝手口を開けると、闇の中から怖こわい顔が——」

お静はよっぽど驚いたらしく、まだ動悸どうきの鎮まらぬ胸を押えて顫ふるえております。

「怖い顔——冗談じゃないぜ、暮の家主の顔より外に、俺は怖い顔なんぞ見たこともない」

平次は口小言をいいながら、お勝手へ行って見ました。

「お前さん、気をつけて下さいよ」

「何をつまらねえ、どこかの野良犬かなんかを見たんだろう——
おや変なものがあるぜ」

「何んです、親分」

「手紙らしいよ、敷居しきいの上に置いてあったが——」

平次は何か白いものを持って来て、灯りの下に展のべました。

「達者な字ですね、——こちとらは読めそうもない」

「——何、——何」

平次は読み下して眼を見張りました。手紙というのは、半紙一枚に達者な細字さいじで書いたもので、その文句は、

そなたの子分八五郎殿は、佐原屋の甥専三郎殺しの下手人として、娘筆を挙げたが、それは飛んだ間違いであるぞよ。

娘筆は潔白けっぱくで何んにも知る筈はない。証拠となった石見銀山も身に覚えがないからこそ手に持って居たのだ。血染の袷も天井に隠してわざとらしく端だけ出して置いたのは不思議ではないか。真の下手人ならあんなことはせずに、何処かへ取捨てる暇もあった筈だ。血潮も飛沫しぶいた血ではなく、染付けた血だ。娘筆が真の下手人でない証拠はまだまだあるが、このくらいにして置いても、明智の銭形親分ならわかるだろう。すぐ娘筆を許して、悪人の策略さくりやくの裏を搔くが宜い。夢々私の言葉を疑うまいぞ。

お筆の父 彦太郎の幽霊

斯う書いてあるのです。ひどく人を嘗なめた調子ですが、真実性が紙面に溢あふれて、八五郎の言葉を聴いて浮んだ平次の疑問を一つ一つ恐ろしい的確さで言い当てたようでもあります。

「親分何んでしよう、これは？」

「三宅島で死んだ彦太郎の幽霊が、江戸へフラフラ来るわけはない。いずれは足のある幽霊の仕業だろうが、それにしちゃ恐ろしく眼が届くね」

「でも親分」

「今から飛んで行きたいが、それ程のこともあるまい。明日は暗いうちから飛び起きて行くでしょうよ」

しかし、さすがの平次も、この時ばかりは恐ろしい縮尻しくじりをやりました。翌る朝早々と深川の島田町へ行くと、町内は唯ならぬ物のけはい。

「親分方」

平次とガラッ八の顔を見たのかさっそく飛んで来ました。

「何うした、何にか変わったことが――」

「あの娘が見えなくなりましたよ」

「えッ」

「お預けのお筆が、夜中に煙のように消えてしまいました。八方へ手を廻して見ましたが、何処へ行ったか見当もつきません」

六

「親分、娘を隠したのは、父親の幽霊じゃありませんか」

八五郎は其処までは気が付きました。佐原屋の内外を、一通り捜し抜いた上、平次と二人、縁側に腰をおろして顔を見合せたのです。

「そうかも知れないが、そうでないと困ったことになる」

「？」

「娘の命が危ないのだ」

「へエ——」

八五郎には何が何やら少しも解りません。

「ところであの手紙は——番頭に見せたのか」

「見せましたよ。島流しになって死んだ彦太郎の筆跡ひっせきによく似ているそうですよ」

「そっくりだとは言わなかったか」

「少し違って居るようでもあるということ——帳面馴れた字は誰のもよく似ていますからね」

「フ——ム」

二人はまた顔を見合せました。

「銭形の親分さん」

庭先へチヨコチヨコと入って来だのは、十三四の賢かしこそうな小僧です。

「何んだ」

「この手紙を置いて行った者がありますよ」

「お前は何んだ」

「留吉とめきちと申します。この家の奉公人です」

平次は忙しく手紙を開きました。昨夜のと同じ半紙が一枚、矢立の墨らしい濁にごった墨色すみいろで、

娘筆は悪者にそそのかされて姿を隠したぞ。これはあらぬ疑いをかけて、娘の心をかき乱した八五郎親分の罪だ。幸いまだ永代橋を渡った様子はないから、遠くへは行かない筈だ。一刻も早く捜し出せ、手遅れになると娘の命が危ないぞ。早

く、早く。

筆の父 彦太郎の幽霊

斯う読めるのです。今度は文字も乱れ、口調も荒々しく少なからずあせている様子で、早く、早くと重ねたあたり全くいても起ってもいられない焦躁しょうそうに駆られている様子です。

「八、お前がひどく怨うらまれてるぞ」

「ヘッ、幽霊に怨まれるのは始めてで」

八五郎は亀かめの子のように頭を引っ込みました。

「女の子に怨まれるのと違って、こいつは怖いよ」

「脅おどかしっこなしに願いましよう」

「だが、これでお筆を隠したのは幽霊でないと解った。が、そうになると一刻も放っては置けない」

「何うしたものでしょう」

「あせっても駄目だよ。こんなときは精いっぱい落着くことだ。

お前は深川中の下っ引を集めて、これだけの事を調べてくれ」

「ヘエー」

平次の声は次第に小さくなりました。

「佐原屋の身上しんしょうがどうなっているか、現金かねの融通ゆうずう、材木、山元との取引など、仲間に訊きいたら判るだろう。出来るだけ詳しく調べてくれ。ことにこの五年の間にどう変ったか、先代の主人の生きている頃と今とどう違っているか、それが知りたいのだ」

「ヘエー」

「それから店中の者の身持、貸借の様子、わけても番頭の藤六と、死んだ専三郎と、後見人の小豆沢あずきざわの懐ろ具合が大事だ」

「親分は？」

「俺は今晚ここへ泊るかも知れない——店に小僧達といっしょに寝かして貰うよ。——お筆の行先が判らないうちは、一刻もここを離れるわけに行かない」

「あっしは？」

「俺が頼んだことを手配すれば、帰っても構わないよ。——あ、待ってくれ。永代橋までいっしょに行こう」

平次はガラッ八と肩を並べて、永代橋の方へ注意深く歩き出しました。色の浅黒い顔がすっかり緊張して、少し唇をくちびる噛んだような表情は、見馴れたガラッ八にも、平次が容易ならぬことを考えて居るのがよく解ります。

「あれは何んだ」

「いざり 甕の乞食ですよ」

平次が指さしたのは、昨日佐原屋の裏へ来ていた、醜怪な甕の乞食老爺でした。

「何処に住んでいるんだ」

「八幡様の裏に小さい小屋をこしらえ住んでいるんですって」

「何時も此処にいるのか、橋番に訊いて来てくれ」

「へエー」

ガラッ八が飛んで行くと、平次は甕の乞食の横に立って、熱心にその様子を観察し始めました。

「親分」

まもなく戻って来た八五郎は、平次を片隅に呼んで声を潜めま
す。

「解ったか」

「昼のうちはたいいてい此処にいるようです。橋番とすっかり心安

くなつて、ゆうべ遅く若い娘が通らなかつたか、そればかり気にしていたそうで——」

「あの壁いざりの小屋へ行つて見よう」

平次は引返しました。八幡様の裏と言っても少し遠く木立の中に、ささやかな掘立小屋が建っております。

「家捜しするんですか、親分」

「大名屋敷へ踏み込むのと違って、気だけでも楽じゃないか。入つて見るが宜い」

「ここからでも一と眼に見えますよ」

「その筵むしろを捲いて見な、——檻ぼろ樓たばの束の下には何があるんだ」

平次は容赦しませんでした。筵むしろの下も、檻ぼろ樓たばの中も、小屋の隅々の土まで掘つて見ましたが、乞食一と通りの物以外なんにもありません。

「ここでお家の家宝でも見付かると面白いんだが——」
と八五郎。

「馬鹿ッ、無駄を言うな。相手は手剛いぞ」
平次は以てのほかの機嫌です。

念のため、橋たもとの袂たもとの家や、八幡様裏の人たちに訊くと、壁いざりの乞食は名前も何んにも判りませんが、顔かたちの醜怪なのに似ず、至つて無害な老爺で、皆んなにも可愛がられ、従つて貰いも多いせいか、金廻りもなかなか良く、もう七八年もここに住んで、深川中を貰い歩いているというのです。

「あの乞食がここへ来てから本当に何年くらいになるのかなア」
平次は幾人かに同じことを訊きましたが、その答えは区々まちまちで、或人は十年と言ひ、或人は、七、八年と言ひ、中には十二、三年

というのさえあって、少なくとも六、七年よりは少ない様子です。

七

その晩平次は佐原屋の店の次の間に泊りました。奉公人たちと一緒にではというので、離屋はなれに泊るように勧められましたが、

「いや此処の方が気楽で宜いから」

と、小僧や手代たちといっしょに面白そうに話し更けて、梯子はしご段の下に寝てしまいました。

翌る日一日、何事もなく過ぎました。夕方近く飛んで来た八五郎は、

「いろいろの事が判りましたよ」

「どんな事だ」

「まず、この五年の間に佐原屋がすっかりいけなくなったという噂は嘘ですよ。佐原屋の商売は主人が死んでいけなくなったが、身上しんしょうはそんなに痛んじやいません。尤も番頭の藤六の臍へそ繰りは溜っておりますがね」

「殺された専三郎は？」

「少しは拵えたでしょうが、たいしたことはありません。思いのほか正直者ですね」

「ゆくゆく佐原屋の身上は自分の物になると思って取込まなかつたんだ」

「なるほどね」

「小豆沢さんは？」

「あれは恐ろしい堅人^{かたしん}で、自分のものは鏢^{びた}一文持っちゃ居ません。——尤も身持は見掛け程ではないようで、隣り町に良い年増を囲っていますかね。その仕送りだってたいしたことじゃないようです」

「フーム」

平次は考え込みました。が暫くすると、

「もういちど八幡様の裏へ行って見よう。あの小屋に見落したところがある」

「へエー、また御大名屋敷へ行くんで」

「無駄を言うな」

街はもう薄暗くなっておりました。八幡様裏の小屋に壁^{いざり}はまだ帰らず、四方^{あたり}に人影もないのを見定めると、平次はいきなり小屋の後ろに廻って、念入りに掛けた風除けの筵を捲くり上げました。その上にもう一枚の莫蔭^{ござ}があつて、莫蔭の中に手を入れると、

「フーム、こんな事だろうと思ったよ」

中に隠してあつたのは、持ち重りのする財布^{さいふ}が一つ、口を開けると中からゾロゾロと小判小粒取交せて十七八両の金が出て来たのです。そのほか莫蔭の中には、新しい手拭^{ちよう}が二三本、真鍮^{しんちゆう}の矢立が一挺^{ちよう}、それにいろいろの小道具に交^{まじ}つて女の児の簪^{かんざし}らしい古い摘^{つま}まみ細工^{さいく}やら、汚れた赤い巾着やら、憐れ深い品々が交っているではありませんか。

「何んでしょう、それは」

「だんだん判つて来るよ、黙っているが宜い。それからこんどは佐原屋だ」

平次は莫蔭や筵をもとの通りにすると、八五郎を促^{うなが}して佐原屋

に引返しました。

その晩平次は、後見人の小豆沢小六郎だけを呼び出して、八五郎と三人膝を交えて話し込みました。番頭も女主人も遠ざけたことは言うまでもありません。

「小豆沢様、一つ考えて見て下さい。あっしの智恵じゃ及びませんか——」

「何を考えるんだ。銭形の平次に判らないことが、この俺に判るわけはないと思うが」

小豆沢小六郎は柔和な微笑を浮べて二人の御用聞を見比べます。

「一万両の隠し場所でございますよ。五年のあいだ天井裏から床下まで——いや材木置場から掘割ほりわりの中まで調べてないとする、あと捜し残しだのは何処でしょう」

「さア？」

「私の考えじゃ、先代の主人——六十を越した人が、一人でそつと持ち出して隠せる場所で、雨風に曝さらされたり、人の目につき易いところでなく、必ず屋根のような気がしますが」

「？」

小豆沢小六郎はゴクリと固唾かたずを吞みました。

「そう考えると私は、一生材木を扱あつかった人だけに、材木の中へ隠したんじゃないかと思いますが、どうでしょう。例えば材木の空洞くうどうに入るとか——一万両という重さは四十貫目もあります、千両箱十の中味ですから、たいした量じゃありません」

「フーム」

「例えば裏の物置の一番奥に立てかけてある二三十本の大きな

材木、あれは床柱などに使う結構な銘木で、滅多に売れる品じゃございません。あの中の二三木が空洞になっているとしたら、どんなものでしょう。尤も穴は上の方でうまく塞いであるでしょうから、素人がちよつと見たんでは解らないでしょうが――」

平次の言葉は奇想天外でしたが、それは併しあるべきことです。さすがの小豆沢小六郎も、それを聴いてはしばらく唸るばかりです。

「では、すぐ行つて見るとしうか」

「いえ、夜はいけません。灯りをつけては人の目に立ち過ぎます。この儘そつとして置いて、明日の朝番頭や家中の者立ち会いの上で調べるとしましう」

平次ははやる小豆沢小六郎を押し留めて、ともかくその晩はきり上げました。

が、事件は翌る日の朝を待ちませんでした。

「親分」

「シッ」

互いに警しめ合つた平次と八五郎は、その晩もう二た刻も佐原屋の物置の隅に隠れていたのです。中は塗りつぶしたように真つ暗な上、埃だらけで蜘蛛の巣だらけで、凝つとしているのは楽な仕事ではありません。

やがてもう丑刻（二時）も近いでしょう。

「誰も来辛しませんね」

「――」

宜い加減しびれをきらした八五郎の腕を掴んで平次は注意しました。その時ちようど物置の戸が開いて、月の光と共に、一人

の怪しい者が滑り込んで来たのです。

曲者は月の明りに透して中へ入ると、いきなり材木の山を渡つて、一番奥にある巨大な銘木の上に攀じ登り、片手を使って小さい窓を開けました。

サーツと水の如く流れ込む月光、その光の中に曲者は、三間あまりの高さにある唐木からきの上に這い上がって、一本一本切口のあたりを覗いております。恐ろしい身軽さです。

「曲者ッ」

平次は叱咤しったしました。

「御用だッ」

つづいて八五郎、二人は暗がりから飛び出すと、左右に別れて曲者くせものの退路を絶ち、

「神妙にせいッ」

サツと飛び付いたのです。

「何をッ」

曲者はしかし軽捷けいしやうで恐ろしい体力の持主でした。平次が得意の投銭でも飛ばさなかったら、この争いはどうなったかわかりません。

辛くも八五郎の馬鹿力で取って押え、月の明りの中に引出すと、
「あつ、小豆沢——」

八五郎が胆きもを潰したのも無理はありません。それは佐原屋の後见人——実体で正直で、この上もなく頼母たのもしがられていた、浪人小豆沢小六郎の忿怒に歪ゆがむ顔だったのです。

「平次、無礼だろう。浪人しても武士の端くれだ、その拙者を手て籠ごめにすると何事だ」

「へエ、これはこれは小豆沢様で、御勘弁を願います。私と八五郎は、宵に申し上げた一万両の金を守護して居ただけのことで悪気があってやったわけじゃございません」

平次は平謝りに謝っております。

「佐原屋の後見人の拙者が、その一万両の隠し場所を覗いては悪いというのか」

「飛んでもない、——毛頭そんなつもりじゃございません。ただ私はあの三間もある高いところへ這い上がって、唐木からきの小口を見るような身軽な人間は誰だか知リたかつたんで。へエ、それくらいの軽業が出来る奴なら、離屋はなれの中二階の朽くさりかけた手摺に飛び付いて、楽に忍び込めるわけで——」

「黙れ黙れ、言わして置けば放図もない奴だ。それでは拙者が専三郎を殺したと言わぬばかりではないか。無礼な奴ツ、岡っ引でも目明しでも、無法な言いがかりは許さんぞ。証拠があるなら言えッ」

「——」

「言わなきや汝おのれツ、手は見せぬぞ」

柔和そうに見えた小六郎が、打って変った激怒げきどに身を顫ふるわせて、一刀の鯉口をきって詰め寄るのでした。

「飛んでもない。証拠などと、——尤も、お筆が生きていさえすれば、何も彼も一ぺんに判ってしまいますが」

「そのお筆はどこへ行った。ここへ伴れて来い。一時のがれの言い訳は許さんぞ。さア、お筆を出せ、それともこの小豆沢小六郎の成敗を受けるか」

こうなると小豆沢小六郎は、執拗しつようで頑固でした。

「親分、お筆さえ居れば、白い黒いが判るなら、そのお筆を捜し出そうじゃありませんか」

親分平次の智恵に委ねきつた八五郎は、たまり兼ねて口を出します。

「待ってくれ、八。俺は昨日からそればかり考えているんだ。――

――あの手紙に、永代橋を渡らない――とあったろう。身を隠したにしてもこの近所では、あの掛引も細工もない娘が自分で進んで逃げ隠れる筈はない。――あの娘を脅かすか、騙すか、ともかくあの娘が居ちゃ不都合なことのある人間が、そつと隠したに違いな――遠くへ伴れて行く隙はなかった筈だ。外は下っ引が鵜の眼鷹の眼で見張っている、そうかと言ってお筆を殺しちゃ後がうるさい、――お為ごかしを言つて逃がしたか、脅かして隠したか」

平次は独り言を言いながら、物置の前をフラフラと歩き始めました。暁近い月は冴えて、この緊張しきつた情景を冷たく照し出して居ります。

「親分」

その後ろから間の悪そうに跟いて来るガラッ八、家中の者はこの騒ぎに驚いて飛び起きたか、とりどりの変挺な様子で、三人を遠巻にして固唾を呑みました。

「――判った八、今まで捜し抜いた場所だ。一万両の金を捜してさんざん掻き廻した場所に娘を隠したのだ。――小豆沢様、しばらく立ち会って下さい。八、お前も来い」

「おう、どこまでも行くぞ、逃げも隠れもする拙者ではない」

小豆沢小六郎は八五郎に見護られながら、それでも肩を聳やかして、傲然と平次に従います。

「提灯を二つ三つ、——それから土蔵の鍵を頼みます」

銭形平次は提灯と鍵を受取ると、土蔵の戸前を開けて入って行きました。

「親分、あっしは入口に張番していますよ。逃げ出す奴があったら、畜生ッ只では置かないから」

八五郎は有合せの天秤棒を毘沙門突きに、土蔵の戸を閉め直してその前に頑張ります。

「さア小豆沢様」

平次はていねいに小豆沢小六郎を迎えて、土蔵の中の唐櫃、桶、蒸籠など、およそ人間一人隠れていそうな場所を一つ残らず開けて見ましたが、お筆の姿は愚か、鼠一匹出て来ることではありません。

側に立ってニヤリニヤリと笑う小豆沢小六郎。

「どうだ平次、筆は消えてなくなったか」

冷たい言葉を平次の背に浴びせます。

平次はそれには応えず、遠く八五郎の方に声をかけました。

「八、材木置場の古井戸は、今年になってから二度も井戸替えしたと言ったな」

「へエ、そのご浪人が言いましたよ」

「それじゃ其処だ。一万両の小判の代りに、可哀想に娘が沈められているかも知れない、急げ」

「合点」

平次を先頭に、多勢の人と提灯はドツと店の前の空地——材木置場の方に流れます。

井戸の蓋を払って見ると、危ない井桁に荒縄で吊られ、水肌す

れすれにブラ下がっているのは、蜘蛛の巣にかかった、美しい蝶ちようのような娘の姿——それは紛れもないお筆の半死半生の姿だったのです。

火を起して身体を温めて、町内の本道（内科医）を呼んで気付
け薬を吞ませると、お筆はようやく息を吹返しました。

その時ちょうど八五郎は、逃げ出した小豆沢小六郎を、八幡様
の裏手で押え、躰いざりの——いや躰でも何んでもない乞食の助力で、
組んずほぐれつ揉み合っているのです。

×

×

八五郎といっしょに小豆沢小六郎を引立てて来た躰いざりの乞食は、
お筆が井戸から助け出されて、危ない命を拾ったと聴くと、人々
のおどろくのも構わず、その装なりで家の中に飛び上がって、お筆の
枕許に駆け寄ると、その手を取って男泣きに泣き出すのでした。
「お筆ッ、よく無事でいてくれた、——俺だよ。お前の父さんだ
よ、——判らないか、この姿じゃなア、——お筆、俺は生きていた
んだ。五年越し躰いざりの乞食になりすまして、よそながらお前の姿を
見張っていたのだ。な、お筆、お前の簪かんざしと巾着を身に着けて、時
節の来るのを待っていたんだ。——」

乞食の述懐は際限ありません。言うまでもなくこの男はお筆
の父親——三宅島で死んだと言われた佐原屋の甥おい彦太郎の変り果
てた姿だったのです。

後で判ったことですが、五年前伯父殺しの罪で、三宅島へ流さ
れた彦太郎は、島に着く前の晩の大嵐で、波にさらわれて船から
海に落ち、そのまま行方不明になったのを、役人たちはどうせ助
かる見込みはないというので、彦太郎は島に着いてから死んだと

いうことにして江戸の役所に届けたのでした。自分たちの手落ちになるのを恐れた、役人根性の誤魔化ごまかしだったのです。

ところが当の彦太郎は、岩にさいなまれて大怪我はしましたが、九死一生のところを、運よく通りかかった漁船に助けられ、それから半歳経ってようやく江戸に帰りました。

しかしうつかり名乗って出ると、島破りの罪でもう一度処刑をされる惧れおそがあり、こんどは島流しくらいでは済まないと思ったので、ひどい怪我で顔容の変ったのを幸い、その上鬢びんの毛を捲むしつたり、ベタベタ膏藥こうやくを貼ったり、蹠いざりの真似まねまでして、佐原屋の様子を見窮みきわめ、娘お筆の身を見守っていたのです。

五年の間——それはおどろくべき辛抱でしたが、彦太郎はどうとうそれをやり遂げましたが、小豆沢小六郎が縛られ、お筆が危うい命を助かったと聴くと、前後の見境もなく、愚おろかな父性愛に還かえって家の中へ飛び込んだのでした。

尤も佐原屋の内部の細々したことや、お筆の日常の様子などは、小僧の留吉を買収して毎日のように聞き出し、お筆が危ないと見ると、幽霊の手紙まで飛ばして、平次を牽制したことは言うまでもありません。

一件が落着いてから、八五郎の問いに対して平次はこう説明してやりました。

「小豆沢小六郎は恐ろしい奴だよ。義兄の甚五兵衛を無惨むざんに殺して、その罪を甥おとの彦太郎になすりつけ、こんどは専三郎を殺して、お筆を罪に陥おとそうとした。次に専之助を殺して、佐原屋の身上しんしょうをぬくぬくと自分へ転げ込む身代だと思ふから、くすねたり誤魔化したりして、人に笑われるようなことはしなかったのさ」

「へエー、太てえ奴ですな」

「義兄の甚五兵衛を脅かして甥二人が怪しいと遺書を書かせたのも小六郎の細工さ。——それから専三郎を殺したとき、中二階の手摺を越して忍び込んだ自分のやり口を、自分で大ぴらに話しているのは恐ろしい智恵じゃないか。大跛者は本当だが、身軽なことはこの上なしさ。俺はその体術が見たいので、わざと唐木の空洞に小判があると言い出したんだ——一万両の大金が俺の言った通り唐木に空洞を拵えて隠してあった事はおどろいたよ。——尤も人が物を隠す場所は大方筋の決ったものだ——あの晩小豆沢小六郎が、我慢が出来なくなつて、捜しに行つて身軽なところを見せたのは運の尽きさ——五年も捜し抜いた金だから、早く見たかつたのも無理はないが」

「親分は最初から小豆沢小六郎が下手人と判つていたんでしよう」

「最初から判つたわけではないよ。尤も現場を見ると、いちおう離屋の中に泊つた者の仕業のようだが、耳の遠い女主人と、倅の専之助と、あの可愛らしいお筆じゃ疑う氣になれない。それに三日目に娘の部屋から石見銀山が出たり、血染の袷が出るのも変じゃないか、——そこで俺は曲者はやはり外から入つたものと見当をつけ、一と晩母屋に泊つて、小僧たちの様子を見たのさ。すると案の定揃いも揃つて死んだもののようによく眠るから、あの様子じゃ二階から飛び降りたつて眼を覚ます氣遣いはないと解つた。——小豆沢小六郎は梯子の下に結構な証人を飼つておいて悠々とどんなことでも出来るわけだよ。ところであの中二階の朽つた手摺に飛び付いて、楽々と出入りの出来るのは、猫の子か

角兵衛獅子か、体術の名人だ。おおちんば大跛者の小豆沢小六郎が、その体術の名人だということを知りたいばかりに、一万両の隠し場所の話をして釣り出したのさ」

「なるほどね」

「もう訊くことはないのか、——何？　いざり躰の乞食が五年前深川へ来たのを、土地の人が十年も前から居るように思っているわけか、——何んでもない事さ。あんな変った躰は誰の眼にもつく名物見たいなものだから、三年いても十年もいるように思うよ。それが人情さ——でも、俺が付添って名乗って出るとお奉行様も『無罪の罪で難儀をしたそうで、気の毒であった』と御会釈をなすつたよ。今では誰はわかるものもなく佐原屋の主人彦太郎だよ。——何？　一千両の褒美はどうなるかって、ハッハッハッ、そいつはお前が小豆沢小六郎と約束したことだ、地獄へ行ったら利息をつけて貰ったら宜かろう——尤も専之助とお筆の祝言には、俺の代理で行っても構わないよ。千両の褒美のつもりでうんと呑んで来るか」

平次はそう言って静かに粉煙草の烟を輪に吹くのでした。けむり銭形平次もしばらく閑寂を楽しむ日があったのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「月刊西日本」昭和二十一年八月号 西日本新聞社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部